4 4 2部隊の真実

── 日系アメリカ人最初の上院議員ダニエル・イノウエの自叙伝を中心 ──

Truth of The 442nd Regimental Comb

— From Journey To Washington By Snator Daniel .K,Inoue with Lawrence Elliott and Other Books —

山　本　茂　美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

昨年12月17日ダニエル・イノウエ氏が亡くなった。日系アメリカ人の研究をする上で必ず語られてきたのが彼の功績である。彼が亡くなった後，オバマ大統領は葬儀に際し弔辞の中で彼の功績をたたえた。

「米上院歳出委員長で，民主党の重鎮，ダニエル・イノウエ上院議員（ハワイ州選出）が17日，88歳で逝去した。1924年，福岡県からハワイに移住した日本人の両親の間に生まれた日系２世で，第２次大戦中，日系人部隊に参加し，その功績は，偏見を受けていた日系人の存在を米国内で高めた。1959年に下院議員に当選以後，上院に転じ50年間議員を続けた。

葬儀には，オバマ大統領，クリントン元大統領が参列し，弔辞を述べたが，オバマ大統領はその11歳の少年時代にイノウエ議員の演説に衝撃的な感動を受けたことが，政治家を志すようになった理由だとの回想を披露した。」以下がオバマ大統領の弔辞の一部である。

(Now, here I was, a young boy with a white mom, a black father, raised in Indonesia and Hawaii. And I was beginning to sense how fitting into the world might not be as simple as it might seem. And so to see this man, this senator, this powerful, accomplished person who wasn't out of central casting when it came to what you'd think a senator might look like at the time, and the way he commanded the respect of an entire nation I think it hinted to me what might be possible in my own life.)

この記事の中で次のようにオバマ氏の心情を述べている。

「オバマ少年の心を打ったのは，太平洋戦争中敵性国民として，強制収容所に収監されるという国家の裏切りにあった日系人の一人であったにも拘わらず，米国の民主主義の理念を信じて，欧州戦線に従軍し，片腕を失いながら大きな勲功を立てた一人の人間の姿であった。オバマ大統領はその時の感動を，『言葉にはできなかったが，心に希望の光が強く差し込んできたのだ』と心を込めた言葉を贈った。

(A man who believed in America even when its government didn't necessarily

believe in him. That meant something to me. It gave me a powerful sense -- one that I couldn't put into words -- a powerful sense of hope.)[1)]

今年初めダニエルイノウエの生涯を考察し論文にまとめたが今回は彼の自叙伝を中心に他の作品も加え４４２部隊の実情を考察したい。ダニエルイノウエの右手を奪った第二次世界大戦中の４４２部隊が持つ意義をこれらの作品を通じて改めて考えていきたい。そして日系アメリカ人の文学作品の中でなぜ日系人の作家によって４４２部隊があまり取り扱われていないかを考えてみたい。

ところで今回いくつかの４４２部隊を扱う作品を考察したがそのどの作品にも必ず書かれている内容がある。

今アメリカ社会で日系人が活躍するのは当然に思うかもしれない。しかしそれには多くの日系人の命が引き換えにされたことを忘れてはいけない。」という内容である。自分たちの名誉と両親を擁護するため命をも惜しまず戦った彼らの勇気があったからこそいまアメリカ社会には日系人が存在できたのである。[2)]

母国を日本と考える日系一世と母国をアメリカと考える日系二世。晩婚のため世代のギャップを乗り越えられず様々な軋轢を抱えていた親子の間を第二次世界大戦という大きな事件が自分たちの意義を考え直させていった。アメリカという大きな国家に自分たちの存在を認めてもらうため命をかけて忠誠を誓った二世たちの生き方を作品を通じて考察していきたい。

１　ダニエル・イノウエの生い立ち

（１）ダニエル・イノウエ誕生前

イノウエの祖父母井上浅吉とモヨ夫妻が４歳の兵太郎とハワイカウアイ島に渡ったのは1899年９月のことだった。彼らの実家は土地で有名な名家であった。しかし原因不明の火事によって自宅だけでなく隣家も燃え弁償金を払わなければならなくなったのだ。そのため大金を手に入れるため井上家の長男夫婦はハワイに出稼ぎに行ったのである。この年ハワイは合衆国に併合された。

当時のハワイのサトウキビ畑は過酷な労働条件であった。ただサトウキビの収穫をするだけでは。わずかなお金しか稼げず日本に送金すると生活はわずか１ドルか２ドルの残されたお金でやりくりしなければならなかった。そこで兵太郎の両親知恵を絞りお風呂を経営し，さらに思うようにお金がたまらなかったので豆腐を作り，当時独身が多かったサトウキビ畑で朝３時から豆腐を売り困難を克服していった。このように他の移民同様日本の文化を守り日本の生活を大切にした浅吉とモヨは兵太郎を日本人学校にも通わせいつか日本に戻った時に困らないようにと教育した。しかし現実にはなかなか日本に帰るだけの十分なお金を稼ぐことができず，やがて土地に永住する決意をするようになった。[2)]

兵太郎は８年かかって仕事の合間に小学校を卒業した。日本への借金も半分以上払い終えていたので兵太郎は思い切ってもっと勉強をしたいと両親に打ち明けた。彼の願いは聞き入れられ兵太郎は生まれて初めてカウアイ島を離れ，オアフ島に移った。ここで寄宿舎の舎監となり，つつましく生活をして25歳の時ミルズ高校を卒業した。この時セオ・Ｈ・デービィス会社の文書係の職に就いた。この間礼拝にも参加しキリスト教の会員になっていた平太郎はこの教会であった女の子と結婚

することになった。

兵太郎の妻カメは広島の三田村からマウイ島のプウコリ村に移住した。多くのお金をもうけて日本に戻るつもりだった今永カメの父は，生活の苦しさに酒におぼれていった。夫婦の間に生まれた5人の子供のうち生き残ったのは2人だけで母はカメを生んだ時も産後のひだちが悪く二か月も寝込んだにもかかわらず，2年後に又出産し，生まれた子供とともに数日で亡くなった。

妻を亡くしたカメの父はさらに酒におぼれ，やがて死を悟った父は長男を日本に帰し，カメだけを残して他界した。島の人々はカメの身の上に同情し教会で世話をした。そのためカメは日系アメリカ人の中でも特に日本の影響を受けずに成長していた。ダニエル・イノウエが日系人として合衆国で大きな業績を残した一つの起因はこの母の生い立ちにあると考えられる。彼が日系社会のしがらみに縛られる事無く胸を張ってアメリカ人として行動をしていったのは，この母のアメリカ人としての強い信念で育てられたからであろう。結婚式は当然教会であったが，兵太郎の両親は初めて教会に足を運んだので，わからない賛美歌に口を閉ざし由緒ある家柄の長男がみなしごと結婚したことへの驚きに耐え，いつかいいこともあるだろうと考えたのだそうだ。こうして1924年9月7日ダニエルが生まれたのである。[3)]

（2）第二次世界大戦前のダニエルについて

死産で生まれた彼が産婆さんの機転で息を吹き返し育ったのはクイーンエマというホノルルのスラム街だった。生活は常に厳しく白人世界と明らかに違っていった。しかしダニエルはその事に影響される事無く元気に生き生きと成長したが，日系社会で育ったダニエルは日本語ばかり話しなかなか英語は覚えなかった。そこで彼の両親は彼が幼稚園に入ると家庭でも一切日本語を話さなくなった。

彼の母はダニエルに言ったそうだ。「昔からある習慣からだって，とっても実用的だと思われるものなら，取り入れるね。新しい習慣からも，結構役に立つものは取り入れるわ。そうしない人はとんまなの。」[4)] このように彼は日本の文化から隔離される事無く東洋と欧米がかち合うこともなく，二つが混じりあった生活をしたのである。これはハワイの日本人社会全体の特色でもあった。

日本独特の長男としての責任を背負いながらダニエルはアメリカ人としての考えを曲げることなく成長していった。近所の老人が日本の天皇を崇拝しその考えを押し付けようとした時，彼は真っ向から反対した。貧しい生活を余儀なくされた多くのの日本人家族が集まる地区で白人に負けないように強くたくましくそして勤勉に成長した。どの日系人の家庭同様に彼も授業後日本人学校に通っていたが，そこで教師に自分達は日本人なのだから日本人らしくふるまえと言われ，彼は強く反発した。時は第二次世界大戦間近な時期だった。ハワイの高校は誰にも公平な公立高校にもかかわらずほとんどが日系人という人種差別があったという。ハワイでは本土程の差別はなかったという資料が多かっただけに，ダニエルの自伝に書かれたこの差別はかなり衝撃的な内容である。

高校でも苦難は続いた。なんとか白人の生活に近づこうとする多くの日系人の若者を非難し自分が正しいと思う事を貫く強い信念の為多くの人間と対立した。しかしこの対立の中で彼は勉強では誰にも負けたくないという野心で医者になる決意を固めていく。さらに親友とレスリングをして左腕を複雑骨折し，ほとんど手を動かすことができなくなった時お金がないこの日系人の少年に手術をしてそ

の代金を彼へのプレゼントだといってくれたクレーグ先生と出会い彼の医師になるという思いがさらに強くなった。

しかし彼の夢を奪うことになる真珠湾攻撃の日が間もなくやってきた。ハワイには人口の40％を日系人で占めていたがこのいつも静かな何事にもまじめで忠実な日系人は，この日を境に敵国外国人となり本土の日系人は強制収容所に入れられみじめな苦しい生活を余儀なくされた。ハワイの日系人は先に述べたように数が多すぎて強制収容は不可能だったので，特に日本との関係が深い日系人だけが逮捕され本土に送られたのである。ダニエルは，自分の平和を壊した日本人を強く非難するとともに，その兵士の中に自分のいとこがいるかもしれないと思った時さらなる絶望が襲ったという。この葛藤は日系移民の歴史を研究し始めた時から多くの日系人の苦しみとしてあらゆる資料の中に残されていた。

2　第二次世界大戦中の日系人とダニエルについて

（1）真珠湾攻撃後の日系人社会

先にも述べたようにハワイの日系人は，本土の日系人と違い強制収容される事はなかった。ハワイに居住していた日系人がいなくなれば生活や経済が成り立たなくなるのと同時に膨大な経費と土地を必要とすることになるためであった。さらにハワイの人々は冷静に日系人と戦争を仕掛けた日本人は違う事を認識し扱ってくれた。しかしダニエルの心の中には後ろめたい気持ちが一杯になっていった。日系人達はラジオや刀など危険と思われるものはことごとく検閲され没収された。それでもアメリカ人であることを認めてもらう為に，彼らはどんな差別的な仕事でも喜んで行った。なんとか白人たちと同じように扱ってもらおうとした。このような行動は，今まで本土の日系人ばかり研究してきた筆者には珍しく感じられた。本土の日系人達は何の行動も認められなかっただけでなくあっという間に敵格外国人として数週間の猶予もないままに家を立ち退き砂漠へと追いやられたからである。一方ダニエルは他のアメリカ人たちと一緒に，けが人の手当ての仕事をしながら学業を続けていった。いずれ医学を目指す為，彼はどんな差別にも負けず自分のできることを努力して続けたのである。

翌年「スカラスティック」誌のエッセイコンテストに作品を出すように言われたダニエルは，自分の気持ちを思いっきり表現した。12月７日の朝，オアフ在住の２世であることはどんな気がしたか。日本人の両親のもとに生まれながら，日本人飛行士のむごい猛攻撃で死んだ男女の散乱した焼死体を処理するとはどういうことかだったか。それを一つ残らず書いたということである[4)]。このエッセイは準州当局の第一位になってさらに全国コンテストで選外佳作になったという。彼の作品が準州当局で一位になったという事がすでに戦争が始まっていることを考えればいかに本土とハワイで日系人を見る目が違っていたか理解できる出来事だと考える。そしてやがて彼が初の日系人の下院議員さらに上院議員に選ばれた要因であると考える。

（2）強制収容所と忠誠登録

一方ダニエルの体験とは異なり，本土ではFBIによって日本語学校教師，商工会役員，僧侶など日系社会の指導的立場にいた者や漁師を「国益を脅かす危険な敵性外国人」として次々に検挙された。さらに「大統領令9066号」により西海岸に住む日系人は1949年２月19日「国防上危険とみなした人々」として砂漠の有刺鉄線に囲まれた粗末な施設へ送り込まれた。わずかな荷物以外すべての家財を二

束三文で売り払いそれでも「仕方ない」と言って黙って砂漠へと向かった。

しかし当時の日系人のインタビューを中心に書かれた「二世兵士　激戦の記録」[6] の中にこのように書かれている。

「ただ仕方ないと言うだけでなく地道に室内を直し戸外には日本庭園を造るなどして環境を改善していった。また歳月がたつと，品行方正な収容者の所外勤労，転居，通学も認められ，ケンも時に，付近の農家に住み込んで農作業に従事した。」と書かれている。ケンは，帰米日系人といって一時期日本で暮らした経験を持っていた。誰よりも日本と母国の争いに心を痛めただろう。

このように厳しい環境の中で耐え忍んで暮らしていた日系人にさらなる試練がやってきた。戦局が厳しくなり戦時転住局は17歳以上の男女全収容所の「忠誠登録」を開始したのである。忠誠登録とは一種の思想調査で，主な目的は，第442連隊の志願兵と，近い将来に再開する日系人徴兵のためのスクリーニングにあった。調査は，生年月日，戦歴，外国語能力などの28項目であった。その中で一番重要なのが27番28番目の質問だった。

27　あなたは，命令されたらどこであろうとすすんで，米陸軍兵士として戦闘任務につきますか？

28　あなたはアメリカ合衆国に無条件に忠誠を誓い，外国または国内勢力のいかなる攻撃から合衆国を忠実に守り，日本の天皇や他の外国政府，勢力組織への忠誠や服従を拒否しますか？

この忠誠登録はもともと収容所に存在した「忠米派」と「忠日派」の対立に火をつけた。こうした雰囲気の中大多数の収容者は27番と28番にイエスと答えた。逆にノーと答えた者は，ツールレイク隔離センター｛カリフォルニア｝に転住していった。その中にはその後様々な圧力に耐えられず日本に帰っていた者も多くいた。こうして登録後陸軍は第442部隊への志願兵を選別し始めていた。この背景にはアメリカ軍の強化のため事態が変わったのは1943年のことだった。1月442部隊への準備が始まったのである。何の制度も強制もなしに，陸軍省は4000人の二世義勇兵を受け入れると発表したのである。歴史上名を残す442部隊はこのような背景で編成された。

この計画を同年2月1日に個人としても承認したフランクリン・H・ローズベルト大統領は，それに関して次のように発言した。「忠誠な日系アメリカ市民の戦闘部隊を作ってはどうか，という陸軍の提案は，私が全面的に承認した。祖先のことはどうであろうと，アメリカの忠誠な市民に，市民としての責任を果たす民主的な権利が与えられないようなことがあってはならない。アメリカニズムとは，心情の問題である。またアメリカニズムとは，今もかつても，決して，人種や祖先の問題ではないのだ。」[7]

この発言はいかにも民主主義を守る合衆国の姿を現しているようであるが，白人とは一緒に軍隊に入れることはできないという世間の意見と，それでもアメリカ人ならその忠誠心を何らかな形で表せという意見と，さらになんとか自分達の忠誠心を表したいという必死の思いをうまく利用した作戦だったのである。この作戦によって多くの日系人が軍隊に入りヨーロッパに渡っていった。この戦争の中でダニエルは目覚ましい活躍をする。

ある匿名の日系人（94歳）が語る。「出征前，収容所に家族を訪ねました。戦地に行くと伝えると，母は膝から崩れ折れて泣きました。きっと私が戦死すると思ったのでしょう。日系兵は『弾よけ』と噂されていましたか

ら。みすぼらしいバラックで泣いていた母…私にとっては，真珠湾の時より悲しい思い出です。」[7)]

自分たちが戦場に旅立てば自分たちの親は少しでも厳しい待遇から逃れられる。“Go for broke！”「死力を尽くせ！」彼らは自らの命をアメリカという国に捧げることによって日系人のアメリカへの忠誠を証明し家族を守ろうとしようとしたのである。

（３）ダニエルイノウエと４４２部隊

1942年ダニエルはハワイ大学の医学部進学課程に受講登録した。しかし彼は当局からの入隊を強く希望していた。応急手当所で仕事を続けていたがもはやハワイは戦場の中心ではなくハワイにいても母国アメリカを守れないと考えていたが，本土で敵格外国人として多くの若者が収容所に入れられている現状の中で，日系人であるダニエルが入隊することは難しかった。ところがルーズベルト発言によって突然彼にも軍隊に入るチャンスが与えられた。こうしてやっとアメリカ人として軍隊に入ったにもかかわらず，初めはハワイ出身の日系人と本土の日系人の間では多くの確執があったという，そこでハワイの出身の隊員を強制収容所に連れて行きどれほど本土の日系人が苦しい生活をしているか見せることにした。ハワイの日系人は有刺鉄線の中で銃弾が人々の方に向けられた中で日系人が生活をするのを知り，本土の隊員がどれほど覚悟を決めて部隊に入ったかを知ったという。そこでその後は，思いを一つにして戦い続けたのである。

442の各大隊はそれぞれ作戦目標を与えられて，イタリア半島を北進した。第二第三大隊は北進し，東北に向かってフィレンツェへ進撃を続けた。４４２部隊の隊員だったチェット・タナカは次のように体験を語った。

「ルチアナという町が数百メートルの高地にあって，そこから西の方向に海岸のリポルノ全域を見渡す事ができる有利なところだった。そこをドイツ軍は監視点にしていたのでリポルノ海岸地帯を全部支配することができた。実はそのことは，おれたちは知らなかった。将校たちは知っていたかもしれないが，おれたち兵卒は何も知らされていなかった。

ただルチアナへ向かって前進しろと命令されていた。ルチアナまで進撃行った途端に，戦車や大砲の砲撃に出くわしてしまった。おれは最初の日に町の外で，88砲の砲撃破片を受けてしまった。そのため２，３週間，戦闘から離れていた。破片を取り出し傷口を縫いあげ，ズルフォンやペニシリンを投与されて，それからまた戦闘へ復帰するのだ。

Ｋ中隊へ戻ったころには，さらに東のフィレンツェ近くまで進んでいた。おれは一等兵から通信担当の軍曹に昇格した，それは人員の消耗のためだ。次々人を失っていくうちに，タナカだけが残る。だからタナカが軍曹になるんだ。」[9)]

このような記述からもわかるように４４２部隊の兵士たちは過酷な環境の中に置かれどんどん命を失っていったのである。

さて望みが叶い軍に入ったダニエル・イノウエは，1945年４月21日，イタリアのサン・テレンツォ近郊における作戦中の際立って英雄的な行動によって，その名を残すことになった。重要な交差点を守るべく防御を固めた稜線を攻撃している間，少尉であるダニエルは自動火器と小銃からの射撃をかいくぐって巧みに小隊を指揮して，素早い包囲攻撃によって大砲と迫撃砲の陣地を占領し，部下たちを敵陣の40ヤードまで導いたという。岩陰に潜む敵は３丁の機関銃からの砲火で友軍の前進を停止させた。ダニエルは自分の安全を考えることなく足場の悪い斜面を機関銃から５ヤー

ド以内の位置まで這い上がり手榴弾を2個投げ込み銃座を破壊した。敵が反撃する前に第二の機関銃座を破壊した。狙撃で負傷しても手榴弾の炸裂で右手を失うほど至近距離で敵と戦った。激しい痛みにも関わらず部下が敵の防衛体制に入るまで指揮を続けたという。敵は25名が死に8名が捕虜となった。彼の勇敢な行動によって要塞を占領し作戦は成功した。

この内容はダニエルの死後のインターネットの情報に載っている[8)]。当時の詳しい状況はダニエルの自叙伝に書かれている。搬送される様子その後の治療の様子，それは医学を目指した彼だからこその記述であった。それは生々しい戦場でのやり取りである。ここにその一部を紹介したい。

私は前進し続けたかった。わが小隊は今こう着状態におちいっているが，その危機を打開する重大な時期なのだ。もし奮起しなければ，いち早くなにかしなければ，一時に一人ずつ狙撃されるかもしれない。となると，それこそ私の責任だ。私はよろめきながら丘を上がった。敵の二番目の機関銃座に二発の手榴弾を高く投げ込むと，私の姿が，そこを守備しているライフル兵の目にようやく止まった。しかし，私はすでにひざまずいていた。どういうわけか敵から妨害もされなかったが，立ち上がれないので，片手で前進するしかないわけだ。「おい，貴様ら，当たって砕けろ」誰かがどなると，部下は，体を丸めながら，突撃して，三番目の機関銃座の猛射をあびるばかりになった。私はワッと大声をあげたいぐらい，奴らのことで意気揚々となった。

それから小隊は，後退して，バリバリと恐ろしい音で撃ちまくってくるあの最後の機関銃から身をかばう羽目になった。…その間，私の方は，敵の機関銃座の側面の道を足を引きずって上がりながら苦しかったが，どうやら手許の最後の手榴弾のピンを抜けるほど，機関銃座に接近した。事実，片手を後ろに引いているときそれこそ一瞬の明暗のうちに，敵の姿が，あの誰が誰だかわからないドイツ兵の姿が，目に飛び込んできたのである。まるで調子が狂った映写機を流れる映像の一片のフィルムのように…。最初の瞬間，奴は中腰で立っていたが，次の瞬間，10ヤードの射程から，小銃弾を私の顔に向けようとしていた。そこで，こちらが手榴弾を投げつけたとたん，発砲され，あの小銃てき弾が右肘にパシッと当たって爆発し，ほとんど片手をもぎ取ってしまった。私はそこに目をやった。愕然として，なんにも信じられなかった。血だらけの2―3本の腱で，片手は肘のところでぶらぶらしているが，手榴弾は相変わらずギュッと掴んだままだった。しかし，この手榴弾との一体感は，意外にも，もうなかった。

この手榴弾こそ，いきなり私の意識に飛び込んできて，先に話したように，私の頭にあった映画みたいな非現実的なものと，仰天するくらいうつろな一瞬の動揺ぶりを，結局は払いのけてくれたのにー。とにかく，手榴弾のメカニズムは，カチカチと秒を刻んでいた。2，3，4秒もすれば，破裂して，私を助けに駆け寄ってくる親切な部下も私も命を落としてしまう。

「戻れ」私はつんざくような声を出すなり，もう神経の麻痺してしまった握りこぶしから，手榴弾を左手でなんとか引き離そうと，くるっとふりむいた。それから，左手の自由がきくようになったので，向きをかえて投げつけると例のドイツ兵が，ライフル銃にまた弾を装填しているところだった。だが今度はこちらの勝ちだ。投げつけた手榴弾が相手の顔で爆発すると，私はよろよろと立ちあがり，敵の掩壕に近づいていって，左手で小型自動機関

銃を撃った。だめになった右手からは，赤い血がピチャピチャたれ，わき腹がびしょびしょであった。[8)]

片手を失い死と直面し彼はその後厳しい時を過ごすのである。彼の勇敢な行動により名誉勲章を受けている。さらに中尉に昇進し殊勲十字賞ももらった。日系移民の歴史を研究する中で４４２部隊の勇敢な行動は多く取り上げられ彼らの活躍により厳しい差別が少しではあるが緩和されたと記録されていた。しかしこの活躍の裏で彼は外科医になるためになくてはならない右手を失ったのである。それが彼の人生に名でどれほど大きな悲しみであったか。彼の自叙伝の中ではさらりと記述されているが，当時書かれた，ジョン・オカダの「ノーノーボーイ」にもあるように，体が不自由になった多くの日系人の中で葛藤が続いたのである。彼の自叙伝の記述のように彼だけではなく４４２部隊の一人一人が彼のようなすさまじい体験をしてきたのであろう。今回ダニエルの行動を知るとき改めてこの勇敢な日系人の功績が成しとげたことは日系人のその後の地位確立の立役者であることを証明している。。まさに日系人の誇りの象徴である。戦後自らの経験を語る日系人はほとんどいなかった。自分たちの体験を文学作品とする作家もあまりいない。今回も資料とした文学作品も第三者によるノンフィクションが多い。自らが語る言葉の力の大きさがいかに人々の心を動かすかも証明している。

（４）日系人の戦後の生活

４４２部隊が強制収容所の被収容者を含む日系アメリカ人のみによって構成され，ヨーロッパ戦線で大戦時のアメリカ陸軍部隊として最高の殊勲をあげたことに対して，1946年にトルーマン大統領は，「諸君の的のみならず偏見とも戦い勝利した。」と称えている。[10)]

しかし現実には日系人に対する偏見は続き故郷に戻った兵士たちも住民から「ジャップを許すな。「ジャップお断わり」といった敵視にさらされ，仕事に就くこともできず財産や家も失われたままの状態に置かれた。

片手を失ったダニエル・イノウエの場合も同様に厳しいものであった。彼は名誉を受けたが失ったものも多かった。先に述べたように外科医になりたかった彼の夢は右腕と共に消えていった。しかし病院に入院している間，彼は多くの負傷した仲間に出会った。自分の不幸な身の上をアメリカや日本のせいにしようとする仲間を叱咤激励し看護師の求めに応えて片手ながら医療の手伝いをするようになった。こうして多くの経験をし，多くの心の傷ついた人々を見ていくうちに彼はなんでも自分でできるようになろうと努力していった。いつまでも沈んでいてはいけないという思いで新たな人生を見つける決意をした。

ハワイ大学に戻った彼は1950年に政治学の学士号を取り卒業した。その後ジョージ・ワシントン大学の法科大学院に進学し1953年にJ・Dを授与された。1954年退役軍人のElton Sakamoto，Sakae Takahashiらと Central Pacific Bank を設立した。彼が下院議員になる前知り合いが準州選出の連邦下院議員になりハワイがうまく州になるように尽力した，４４２部隊の復員軍人が準州議会や市議会にどんどん選ばれるようになった。1950年にハワイ大学を卒業するまでに彼はハワイ大学の先生だったマーガレットと結婚しアメリカ本土に渡った。大学の授業の合間に民主党の事務所で仕事を始めたダニエルは，先に述べた銀行を設立した後1953年８月司法試験に合格した。しかしその頃彼は政治に興味をもっていたので弁護士事務所の看板を出すことなく政治家になっていった。1957年，先の友人

ジョーンバーンズのすすめにより彼は選挙に出ることを決意し1959年民主党からハワイ州選出の連邦下院議員になりアメリカ初の日系議員となった。その後1963年には先輩議員の引退で後継者となるべく上院議員になりさらに４４２部隊の団員だったスパーク・マツナガも下院議員になった。このように彼が新しい人生を歩き始められたのは，もちろん彼の努力もあったが，強制収容所の理由と同じように彼の生活の基盤がハワイであったことも大きな要因であったであろう。

最後にダニエル・イノウエの政治家としての業績を紹介しておきたい。彼は民主党の上院銀として上院歳出委員会の国防章委員会で上級委員を務めたほか，カリフォルニア州ロサンゼルスの日本人街リトルトウキョウにある全米日系人博物館の理事も務めた。この博物館はダニエルの二番目の妻が館長を務めていたこともある。この博物館には強制収容所での資料や当時の収容所の再現，マイクロフィルムによる当時の新聞や出版物の保存がされている。強制収容所での貴重な資料である。さらに2006年６月21日に陸軍殊勲十字軍，青銅星章の授賞理由が見直され，軍人に贈られる最高位の勲章である名誉勲章を受章したほか2007年11月，フランス政府からレジオンドヌール勲章を授与された。2008年アメリカ合衆国大統領選挙において，ヒラリークリントン上院銀を支持した。2010年には苦戦の末再選された。[11]

彼の何よりの功績は，1988年の市民的自由法の成立への働きかけである。戦後収容所を出て故郷に戻った日系人は，自分達には何か非があったから収容されたんだと自分を責めた。収容所で体験をしたことを語ることなく静かに生きることを強く願った。しかし時代は変わり，日系三世が成長し，自分達のアイデンティティーを探るようになった時じぶんたちの祖父祖母たちがひどい扱いを受けたことに気付いた，そこでこの扱いを正すべく運動を進めた。この運動にダニエルが力を貸したのである。はじめは口の重かった一世たちは補償問題でヒヤリングを重ねるうちに自分達の体験を語るようになった。ここで集められた資料をもとに多くの文学作品が生まれていった。1988年市民的自由法が成立し自分達の正義を正されたことで日系人達は金銭だけでなく名誉も得たのである。[12] 1980年代に，日米間の貿易摩擦が政治問題化した際には，リチャード・ゲッパーなどと共に，対日批判の急先鋒として立ちまわったが，晩年は日本に対して融和的に変わったという。2007年に中国や韓国が「慰安婦強制連行説」を主張して合衆国がそれに伴う121号が下院で決議されたとき大日本帝国軍人によって慰安婦に暴行抑圧をしたことは疑いの余地はなく，日本政府の６人の首相と２つの衆議院決議が1994年以来問題を認め謝罪を行ってきたことを尊重するべきだとして，対日外交の継続性の観点から新たに謝罪を求めることに反対した。2012年12月ワシントンD.・C郊外のメリーランド州ベセスダにあるジョージ・ワシントン大学病院に入院し，酸素吸入の処置を受けていたが17日17時過ぎ，呼吸器合併症で死去。88歳だった。死亡前最後の言葉として次のように語ったという。

「ハワイと国家のために力の限り誠実に勤めた。まあまあ。できたと思う。」最後の言葉は「アロハ」だったと書かれている。[12]

終わりに

ダニエル。イノウエの伝記の付録に彼の議会での発言，４４２部隊に入った理由のスピーチなどがある。彼は日系人の名誉の為に志願したという。

数年前の話ですが，うちの息子がが第４４２部隊のことと，それが第二次世界大戦に参加して血を流したことを知るようになると，家庭なり討論会で，今まできっとたくさん出たでしょうが，わかりきった質問をしました。「どうして，兵役をしがんしたのか」というわけであります。

兵役を志願してから40年もの歳月が流れました。なぜあえて志願したか。たとえ子供でらのためでなくても，私たち自身のために，その理由をはっきりさせるのは，時期にかなっていると思います。兵役を志願したのは，何人かの同僚なり多数の家族や親類を，有刺鉄線が張り巡らされた荒涼とした殺風景委な収容所，婉曲な言い方をしますと，『抑留所』ですが，そこに送り込んだ国のために戦おう。そう思ったからです。[13)]

自分達の名誉が４４２部隊の活躍で認められやがて差別にあふれた日系人社会に少しずつではあるが光が見えていたのである。そして彼は，この戦いで自分達のような日系人が政治に参加する機会を勝ち取ったと感じていた。４４２部隊に関する作品を調べていくときどの作品にも必ずダニエル・イノウエの記述があった。それほど彼の勇敢な活躍と多くを語ろうとしない数多くの日系人の心を代弁してきたということであろう。

日系人が上院議員になることがどれだけ大変かは理解してきたつもりであったがそこには自分はアメリカ人なのだという強い意志，日系人としての名誉のために動かされてきたという認識がなく，あらためてどれだけ日系人が名誉の為に涙や地を流し生きていたかを認識した。

彼の棺は，アメリカ合衆国議会議事堂中央にある大広間に安置され追悼式が開かれた。大広間に安置されたのは，リンカーン，ジョン・F・ケネディなどの一部の大統領とごくわずかな議員だけであるという。このことを知ったとき日系人たちがどんなに誇らしく感じた事だろうと考えた。市民的自由法成立のときに日系人の名誉のために戦い名誉を回復し，アメリカ社会が日系人の存在を認め，ダニエル・イノウエの命がけの努力が認められた証拠であろう。第二次世界大戦中の４４２部隊をテーマにした文学を考察してきたが，日系人の手で書かれた作品の少なさが改めてこのテーマの重さを物語っていると思われる。

注

1）http;news-log.jp/archives/5950
2）ダニエルイノウエ，森田幸男訳；上院議員ダニエルイノウエ自伝，pp20－p41
3）ダニエル，pp231－232，318，118－119。
4）ダニエル，pp67－68.
5）ダニエル，p115.
6）柳田由紀子，「二世兵士　激戦の記録」p126.
7）柳田，p86.
8）http;//www.foxnews.com/politics/election/candidate/Daniel-ken-inoue/
9）柳田，p198.
10）山本，p126.
11）ダニエル，p414.
12）この内容については多くの論文で考察してきた。
13）ダニエル，p412.

Works Cited

- http: news-log.jp/archives/5950
- ダニエル・イノウエ，森田幸男訳「上院議員ダニエル・イノウエ自伝」，彩流社，1989年，東京。
- 柳田由紀子，「二世兵士　激戦の記録」，新潮書館，2012年，東京。
- http;//www.foxnews.com/politics/election
- 山本茂美，「愛工大研究報告第48号，2013年３月，愛知。

Works Consulted

植木照代ほか，「日系アメリカ文学　三世代の軌跡を読む」，創元社，1997年，東京。
ジョン・オカダ，中山容訳；「ノーノーボーイ」，東京，1981
Danieru. k. Inoue, Journey To Washington, 1967, Sairyuusya, Tokyo.
海沢富（トミ・カイザワ・ネイフラー），Our House Divided, University of Hawai Press, 1991，Hawai.
猿谷要；アメリカ史重要人物101，新書館，1997年，東京。
武智鎮典，「４４２部隊の真実」，ポプラ社，2012年，東京。
前山陸；ハワイの辛抱人，お茶の水書房，東京，1986。
西山千，「真珠湾と日本人」，サイマル出版，1991年，東京。
山本茂美，ダニエル・イノウエの生涯―日系アメリカ人最初の上院議員の光と影―，AIT愛知工業大学研究報告，48号，Vol. 48，2013.